ヘンリー・フォールズ『ニッポン滞在の9年間 -日本の生活と仕来りの概観-』（第8章）

メタデータ	言語: jpn
	出版者: 明治大学教養論集刊行会
	公開日: 2019-03-27
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 長尾, 史郎, 高畑, 美代子
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19932

明治大学教養論集　通巻536号
(2018・12) pp. 153-167

ヘンリー・フォールズ『ニッポン(Nipon)滞在の9年間
── 日本の生活と仕来りの概観』

長　尾　史　郎
高　畑　美代子

第8章　御岳山 ── 三峰の聖山

昼夜の激しい仕事の後，暑い季節のある朝，夜明けの遥か前に，青白く病に窶れた(sick-worn)子供たちとともに出発した。急いでぬかるみの道路を，苔生した壁のある堀に沿い，陰鬱な長く連なる郊外の木造住居に沿って進んだ ── 住民たちはちょうど起きて活動に就こうとしていた。時々，汗かいた人力車夫は停まって，指ぬき状の小型湯呑で色の薄い茶を一杯飲み，ちっちゃな煙管で一服し，発作的なお喋り(しゃべ)をする ── 話題は主に，極めて意味深重だが西洋人の耳には，道路の品質についての温和な叫びである ── 道路は彼らの職業にとっては極めて一貫した品質低下を惹き起こしているに違いない。可哀想な人々よ！　私は訝(いぶか)るのだが，誰か或る日本版のトマス・チャーマーズ[1]が，

---

[1] トーマス・チャーマーズ（Thomas Chalmers, 1780-1847）はスコットランドの聖職者，スコットランド自由教会の設立者である。／スコットランド，ファイフのアンストラザー（Anstruther）の商家に生まれた。1796年からセント・アンドルーズ大学で神学，数学，天文学を学び，1799年からそこで数学を教えた。エディンバラ大学で学んだ後，1803年からファイフのキルメニのスコットランド国教会の牧師となった。1810年から1811年ころ，福音派に傾倒するようになった。1815年からグラスゴーの牧師となり，救貧のあたらしい仕組みとして公的救済を廃止し，「生活の自助」「親族の援助」「労働者階級の相互扶助」「有産階級の慈善」に基づく救貧の仕組みを作った。この仕組みは長く継続することはできなかったが，後世に影響を残した。／1823年にセント・アンドルーズ

彼らの提起する問題を解くことができるのだろうか。やがて太陽は笑いながら上り，それから入院治療，じめじめして冷たい靄が同時に消え去るように見えた。子供たちは花咲く生垣の列，辛抱強い牡牛（oxen）たち，賑やかな村祭りを楽しみ始めた。── 日本人は常に，陽気な提灯と楽しい行列で或る逝去した昔の皇帝［天皇］やその曾叔父（great grand uncle）の誕生やらを記念しているのだ！[2]

時折り，停止して人夫たちに食事と休息を供した。誰か近在の農家の者た

大学の倫理学（Moral Philosophy）の教授となり，1828年からエディンバラ大学の神学の教授となった。スコットランド国教会の福音派のリーダーとなり，工業化社会の始まりに対する新しい教会のあり方に対応し1834年から1841年の間に200の新しい教会を作った。1834年にエディンバラ王立協会の会員となった。／1843年にスコットランド自由教会はスコットランド国教会から分離した。／神学などに関する多くの著作を執筆し，優れた説教者として知られていた。

［https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%88%E3%83%BC%E3%83%9E%E3%82%B9%E3%83%BB%E3%83%81%E3%83%A3%E3%83%BC%E3%83%9E%E3%83%BC%E3%82%BA］

2　青梅大祭の様子を描いたものか。残存する5体の山車 ──

森下町・武内宿禰

上町・日本武尊

ちが甘いものや気をそそる果物，野菜を，それに時折り何か賑やかな花々とともに持ってきてくれ，子供たちが出てきて，道すがらの庭園のような野原の青々と茂った植生の中で歩き回っていた。大きなけばけばしい蜘蛛 ── それは注意を攪乱するために，面白いジグザグの網になった巣を震わせ始めた ── を見つけるとき，あるいは，一群の銅茶色の黄金虫が柔らかな葡萄の葉を刈るのを発見するとき，新たな喜びで眼を大きく見開くのを見るのは素晴らしかった。しまいには，我々がこれまで見たこともない紅いほっぺと輝く目をして，驚嘆すべき発見を報せに駈けつけて来るのだった。それは最も風変わり

仲町・静御前

本町・武内宿禰／皇子（応神天皇）／神功皇后

住吉町・神功皇后

「昔の皇帝［天皇］」云々は，これら「神功皇后（じんぐうこうごう）」等を指すものと思われる。因みに，系統関係は ──

第14代仲哀天皇（ちゅうあいてんのう，成務天皇18? - 仲哀天皇9）は日本武尊（やまとたけるのみこと）命を父に持ち，皇后は三韓征伐を行った神功皇后である。

山車は牡牛に曳かれる ──

で面白い珍しい，日本の案山子（かかし）そのものだったが，これらの真面目なページのためにはほとんど似つかわしくないだろうことを恐れるのだ。

すぐにまた速度を上げて出立した。人夫の一人の契約が切れたので，新手が一人，仲間に加わった ── 彼は奇妙な喉音の「スラング調」の日本語を話したが，我々の誰も明瞭には理解できなかった。数時間後，夕食のために小さな小奇麗な道端の茶屋で停止した。中には大きく太った金魚がいて，大きなスコットランド風の「小川（burn）[3]」があり，泡立ち，苔生した大石を縫って流れていた。私はここで見物に群がった村人たちに沢山の本を配布した。またもや出立だ！ ── 非常に広くて，葉が茂った真ん中を堀が走る道路に沿って，何マイルもずんずん進み，皆がこっくりこっくりし出して，ふと目覚めると，夜中に寂しい森の中を，のろのろと引き摺られていたのだった。雨が車軸を流したように頭上に降り注ぎ，哀れな人夫（クーリー）たちでさえも暗闇で見えなかった ── ただ稲妻が陰鬱な情景を照らし出す時は別だが。男たちは皆，恐れをなし始め，彼らをしゃんとさせ，協調させておくには持てる限りの私の知力の限りを要した。時々停まって，5から10分間，他の者たちに呼び掛けなければならなかった ── 明確な路を見出せず，人夫（クーリー）の一人はかなり気持

明治32年の上町の記念写真（青梅囃粋買會主催　講演会資料より）
[http:// 青梅大祭 .com/new-omeHP/ome.co.jp/katunuma/katunuma_abaut_oumetaisai.html]

3　BURN, n. Exclusively Sc. usages of Sc. and Eng. burn, stream. Dim. burnie. ／1. “Water, particularly that which is taken from a fountain or well”（n.Sc. 1808 Jam.; Abd.[22], Lnl.[1], Arg.[1] 1937）. [Scottish National Dictionary（1700-）—http://www.dsl.ac.uk/entry/snd/burn_n]

ちが萎えてしまっていた。彼は二度と陽気な気質を完全に取り戻すことは無く，私は自分が主に迷信的な脅威に圧し潰されていると思った。暗く湿った森でこの作業を二時間，進めたが，やっと人声と，せわしなく動き回る人々のいる賑やかな所にたどり着いた。

そうした陰鬱な夜の後では，清潔な日本旅館よりは悪い場所に泊ったこともあったが，我々は皆，それでもその快適さを十分味わった。その土曜の夜に丘陵にたどり着くつもりだったが，私は途上でそのような満足のいく安息日の休息場所を見つけたのを遺憾とはしなかった。私は，一定の諸規定に従って注意を払いながら，集会を開く手はずを整え，周りを探索するために外出した。青梅は大きく非常に美しい市場町で，その当時満開の並木，〕節くれだった松と桜に，幾らかのスモモの木と，縮緬の銀梅花（ギンバイカ）の遊歩道がその街道の真ん中を通っていた。町は丘陵の麓に在り，丘が雄大な森林になっているのは，まさに迸る川 ── これが東京に水を供給する ── が，周りの谷から湧き出，平原へと陽気に流れ出すまさにその場所においてだった。町の在る場所は，古代の川が置き残した大石の散らばる河岸段丘（かがんだんきゅう）上だった。氷河作用（glaciation）の明白な証は無い。町の誇りは立派な寺院[4]で，そこへは極めて高く危険な階段を上って行く。人々は体格も良く，東京近辺の人々より一般に健康に見え，牛たちも目立って大きくよく太っていた。

寺に参り，極めて大勢の子供たちが神社の周りで遊んでいたが，彼らと会話し，たくさんの絵入りのヨセフ［キリストの養父］の伝記本を配布した ── これが出版されたもので唯一の著作だった。それほど遠くでないところで，綺麗に梵字（サンスクリット）の彫られた石片に出くわした ── 思うに，恐らく，堕落

---

[4] 「寒山寺」のことか ──

［http://www.jalan.net/kankou/spt_13205ag2130012940/］

［土地の人のスケッチより――子を負っている女］

した極東の仏教が余りに容易（たやす）く依拠しすぎる真言（mantra）ないし呪文（charm）の１つだろうが，しかし私の乏しい梵字（サンスクリット）の知識では解釈には何の役にも立たなかった。再び町に下りると，一人の親切で心温かい老婦人が，我々の小さな者たちが喉が渇いているのを見て，自分の清潔で小さい小屋に招じ入れ，各々に極めて優雅に美味しくも冷たい水を茶碗に一杯差し出したが，それは東京の富をもってしても市中で買い得ないだろうものだった。恵み深い異教徒の女よ，汝の親切かつ優しい行いが，あの**偉大なる最後の審判の日**に汝について思い起こされんことを！

晩までに私は善き聴衆に述べる用意がしてあり，指定された時間に通りに向かって開いている茶屋の大きなホール――親切にも私に申し出があった――に下りていった。空の座布団の列を眺め渡した時の私の老いた料理人の当惑を見るのは面白かった――確かに彼は成り行きをとても徹底的かつ意識的に誇大に思っていたのだ。私は努めて彼に，聴衆は心配無い，満場になると納得させようとし，戸口のところにいた子供たちに気楽に英語で語りかけた。これは抵抗不可能だった。尊敬すべき人々は，銀行預金は少額でさえも，あたかも指名を待つかのようにゆったり歩き回っており――もちろんどの提示された集会にも無意識で――，もったいなくも通りすがりに立ち止まり，ちんぷんかんぷんなものにちょっと笑って下さるので，彼らを全部捕（つか）まえた。三十人ばかりで始め，聖書の一部分を読み終わる前に部屋は満員になった。幾人か騒がしい若い日本人たちが――恐らく東京からだ――，余り

丁寧でない言葉で十字架の教えを声に出して批判し出した。しかし彼らはすぐに，聴衆が心から評価した，丁寧だが遠回しの一突きによって，沈黙へと突き落とされ，幾人かは密かに，我々に合流しようと滑り込みさえした。次第しだいに，官憲の頭が，小集団と共に通りがかりに覗き込み，もったいぶって他の者たち――座っている――を上から見下ろしていた。奇妙至極にも私はちょうどその時，話を進めて，我が聖なる宗教は，権威者に然るべき尊敬を払うことを要請していると述べていたが，彼が話の終わるまで待っていたので嬉しかった。丸々二時間に亘り，私は，誰もが望み得る限りの注意深い聴衆を得たのであった。

私はキリストの生涯の主な事実を語った――それが異教徒の眼に映っただろうと想定するように――聖性の主張がユダヤ人たちの主への嫌悪を惹き起こしたことについて，主の奇妙な裁判が混合した司法形態で執行され，主を道徳的犯罪で裁き，しかし主が自分自身を神と称したことに対して断罪したことについて，主の奇妙で恐ろしい死・埋葬と復活の報せについて，語った。私は進んで，最後の事柄の証拠について話し，西洋の文明化された諸種族が速やかに，それを栄光ある事実――全ての人々への希望に満ちた――として受け容れるよう強いられたと告げた。私が復活について語ると，彼らは，他の人々が昔，笑ったようには笑わず，一人の立派な身なりの，顔色の悪い白髪の老婦人が，太って豊かで陽気な顔の夫の脇に座っていたが，言われたことの全てを大いなる熱意をもって飲み込んでいたが，彼女が最も丁重な日本的仕種で私を押し留め，こう言った――彼女は，外国人の私がこれまで言ってきたことをとてもよく理解した。でも彼女は，イエスが，墓に葬られた後で死から立ち上がったと私が語ったときには，全く理解できなかった，と！

手持ちの本は皆，急速に捌け，もっと多く配ることもできただろう。それらについての質問は自由に尋ねられた。夜になって私が引き籠(こも)ったずっと後で，耶蘇(Yasu)の宗教の主題についての囁き声を聞いたが，それは最近まで，ありとあらゆる恐ろしい御呪いの同義語であった。しかし，三浦［徹］氏――非

常に有能な日本人伝道師(preacher) ── が現れたときも，実際にはあまり勇気づけられることはなく，急速に元へ戻った。私はこの成り行きについて必ずしも彼と完全には合意しなかった ── 実際の反対が提議されたことは無かったからだが，それは今では ── 幸せにも言えるのだが ── 日本では（全ての平和な宗教が許容される所だ）非合法だろう。付言するのが正しいが，この場所は，ある仏教僧正の教区(diocese)内にあり，彼は，地球は平らだと考え，そうした愚かな教義に対して，横浜では，現代的な傾向の若者たちが群がり騒いだようだ。最初の講演で，そしてそのことについて何かを知る前は，私は，極めて独断的に，その反対の意見を述べ，陳述を支えるために科学的著作に訴えた ── もっとも，その主題とキリスト教との直接的な関係については未だに完全に確信しているわけではないのだが。しかしながら，私はこれらの事柄が究極的に我々を助けるという確信を持ち，人々が，普通の事柄については我々の方が彼らの教師たちより正確かつ信頼のおけることに気づき始めている。

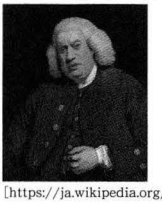
未だに正規の福音的な作業を外国人遊歩規定外(interior)［条約港・居留地外］で組織するのは極めて困難なのだが，それは我々の教えに対する頑固一徹な不寛容のためでなく，単に外人は旅券を必要とされるという事実のためで，これまで［外国人遊歩規定外(interior)に行くための］合法とされた対象と言えば「科学研究」と「健康」だけだった。私はあれこれの階層の人々の善良な(bona fide)使い役として以外では決して出て行かなかった。しかし，確信しているが，この規則でキリスト教の伝播について我々を制約しようというのが日本政府の意図ではなく，単に，条約港外の純朴な地方人に大規模の商取引を課するのを阻止することだった。それゆえ，キリストの福音を宣言する時折りの機会を掴むことには，過ちも非合法も全くあり得ないのだ ── 情報に通じていない誰彼がそう想定したりしていたが。この手順の合法性は，今では当局が疑問視することは全く無い。しかし私は信じているが，そうした既存の諸条約の修正がなされ，外国人遊歩規定外(interior)での我々の言語の制約されない使用のみならず，我が大義の説得のための正規の旅行の組織も許容されるようになるだろう。

日本政府は極めて卓越した精神を披瀝し，大体において寛容だ。残るは我々の広報と高官たち自身が，時には支配的だったよりは　幾らか協調的かつ融和的な態度を示すことだろう。

青梅の綺麗な町を発って，桃林（peach orchards）を過ぎ，立ち上がる谷を抜ける陽気な旅の末に，あの「大なる隆起（protuberances）[5]」の厳かな影の下へとやって来た ── これは，サムエル・ジョンソン博士にもかかわらず，常に純正の心暖かいスコットランド人を畏怖させ元気づけるものだ[6]。ここでは川は，入り組んだ竹林の羊歯のイモトソウ（brake）と新鮮で薫り高い松を透かして遥か下を，陽に輝く白い小石の原を通って流れるのが見られた。また，ぎこちない絵のような水車があちこちに，岸にしっかり繋ぎ止められたていたが，雨の洪水が川面を持ち上げるときには緩められる巨大な船の上に築かれて点在していた。山中の森から人口の多い平野まで漂う多数の粗削りした木の筏があった。道は，田舎の山道にしては非常に良く，地質学的に非常に多様な巨大な岩石で構築されている。どの大きな村からも遥か離れた一つの場所で，非常に大規模な学校が新たな外国風に建築されていていたが，しかしスイス風で浪漫風の修正が施されていた ── 男児の記憶が愛をもって抱き着くような場所だった。私は，国中に広まるそうした新学校の幾つかを訪問したが，幾つかの眼目立った効

5　多摩川上流の御岳渓谷を指すものと考えられる。

6　**サミュエル・ジョンソン**（Samuel Johnson 1709-1784）──，イングランドの文学者（詩人，批評家，文献学者）。「英語辞典」（1755年）の編集で知られる。

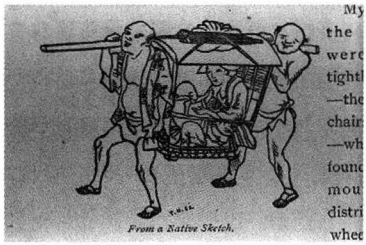


[https://ja.wikipedia.org/wiki/サミュエル・ジョンソン]

"The noblest prospect which a Scotchman ever sees, is the high road that leads him to England!" [「スコットランド人が見る最も高貴な見通しは，彼をイングランドへと導く道だ」── 拙訳]

James Boswell: *The Life of Samuel Johnson, LL.D.* (1791)

果があるのを目撃して嬉しかった。今，何より必要とされることは最新で良質の教科書 ── 日本の変化した時代と新しい生活に相応しい ── である。日本人は我々自身の多くの最良の教科書の翻訳を採用したが，しかし，その少なからずのものが日本文明には不自然な移植である。今，ミッションスクールが全国的に開校されつつあり，それに我々は接近可能だが，この種の何かが極めて近々に試みられるであろう ── しかも相当の成功の望みをもって。多くの者が聞いて驚き，喜ぶと思うが，日本には，今は公式の安息日の休息 ── それはますます広く影響を広げているのだが ── が無いだけでなく，政府の教科書もまたしばしば有神論的（theistic）で，言語における曖昧さの故に単神論的（monotheistic）でさえある。或る者は思うかもしれない ── しかしながらこれはむしろ，近年の日本の進歩を全体として特徴づける折衷主義（eclecticism）の一例だ，と。しかし，有神論（theism）も単神論（monotheism）も極東にとって全く新規かつ外来のものではないのだ。



［日本の画家のスケッチから］

私の妻と子供たちは駕籠 ── 日本古来[7]のセダン椅子タイプの乗り物 ── の中にぎゅっと閉じ込められていたが，今でも山地の地区では有用なもの

[7] 「駕籠の起源だが，土木作業で用いられる「もっこ（畚）」のような運搬道具が原型ではないだろうか。もっこがいつから存在したのか定かではないが，一四世紀成立の『曽我物語』（「東洋文庫」）には「あんだ」，同時期成立の『太平記』26（『日本古典文学大系』）には「あをだ」と呼ばれる運搬具が伝えられる。この語源は『和名類聚抄』刑罰具には囚獄司が罪人を弾正台へ連れて行くときに乗せる道具として「篋籠（あみいた）」という運搬具が記述され，これを駕籠の起源とする説もある。しかし「篋籠」「あんだ」「あをだ」の図像を具体的に名指しするような絵画史料で証明できない以上は再考を要する。」［佐多芳彦「車から籠へ」『古代交通研究〈第13号〉』2004/5］

で，そこでは車輪付きの乗り物は走行できない。

苦労して影の路を登ったが ── それは静かな小村と寺院が霧の山頂に座すところに通じていた ──，どこでも冷たく透明な小川の瀬音，樵の斧音，あるいは蝉の鋭いが不愉快ではない鳴き声 ── ほとんど信じられない程の遠方から聞こえた ── によって元気づけられていた。一度か二度，その金属的な鳴き音 ── 甘く床しいバグパイプのようだ ── が遠隔からの魔力を導き出すのを聞いているとき，彩色された歌い手が突然，歌を止め，足元に死んで落ちた。その中心の三つの眼[8]はまだ独自のルビー様の輝きで光っていて，外観と色彩は全くはっきり見えたが，内部は単なる塵と腐食の塊だった ── 致死的な蘚苔類が急速にその生の組織を食い尽くし，甘い声のみを ── 他の何物でも無く ── 残していた。多くの昆虫はこのようにして死に，特別の寄生的菌類を養い種蒔くべく供される ── そうした菌はいかなる所与の種にも，容易に感染され得るところでは，敵対的である。かくて，大いに乱用される病原菌は，まだ人間に友好的な働きを供する余地があるのだ。

この山脈の山々には非常に多様な木材があり，林業部門はこの点についての日本の経済的必要に敏感になり始めている。非常に小奇麗な書籍が文部省から公刊されており，それらは生育される木々の全ての少しづつの割合を含んでいる。森林伐採が「古き良き」封建時代には急速に進んでいたが，しかし，警告の声が発せられると，有効な手段が発令されて将来は悪徳が軽減さ

---

[8] 実際は5つある。

「顔の横にあるのが2つ。これは物を見るための目です。複眼と言います。あおい矢印がしてあります。そして，真ん中にある3つのポチポチ。黄色の［3つの小］矢印がしてあるところ，ここも目になります。この目は光を見ています。」
［http://fureai-aikawa.com/blog/2013/08/post-526.html］

れるだろう。西洋の科学活動との交流からこの国が刈り取ろうとするものの多くは長所となるもので，後世に対する好意的な先見性が，確かにキリスト教文明から導出される徳の最小のものではないのだ。彼らは多くの新しい樹木を植えた── 例えば，ユーカリつまりオーストラリア・ブルー・ガムツリーで，その普遍的な徳についてどちらかと言うと広く誇張されたイメージが，ヨーロッパと同じくここでも広まっているようだ。

我々が目覚めて，より稀な雰囲気に入って行ったときに，喜ばしくも涼しいと感じ，森の道はほとんど生の霧で薄暗く，それは直ちに人をどんな仕事に向かっても引き締めるようだった。バックル[9]は部分的に正しい── もっとも，この分野では遅かったのだが。しかしながら，この山の空気の影響は失望するほど一過的で，思うに我々はまだ大いなるマラリア性の霧の毛布の

9　**ヘンリー・トマス・バックル**（Henry Thomas Buckle 1821-1862）── イギリスの歴史学者。“History of Civilization”（文明の歴史）の著者。

本文との関連があると思われる記述として ──
バックルの名声はひとえに“History of Civilization in England”（英国の文明の歴史）によって今日まで残っている。これは未完成に終わった壮大な構想の序説であり，その構想は，第1に「著者の方法論の原理」および「人間の進歩の道筋を決定する一般的な法則」について述べ，第2にスペインやスコットランド，アメリカそしてドイツといった，顕著で独特な特徴を持つ実際の国々の歴史を通してそれらの原理や法則を例証するというものであった。その主な見解は以下の通りである。

> …3. 気候，土壌，食糧，そして自然の様相が知性の進歩の主要な原因である－最初の三つは富の蓄積と分配を決定するが間接的で，最後の一つは思考の蓄積と分配に直接的な影響を与える。外界の現象が過酷で畏敬すべきものであるとき，想像力は刺激され理解力は抑えられる。外界の現象が小さく弱いものであるとき，理解力は刺激され想像力は抑えられる。／4. ヨーロッパの国々とそうでない国々の文明の大きな差異は以下の事実に依拠する。すなわちヨーロッパでは人が自然よりも強く，その他の土地では自然が人よりも強い。その結果として，ヨーロッパにおいてのみ人が自然をその活動のうちに服従させることができる。［https://ja.wikipedia.org/wiki/ヘンリー・バックル］

下に居たのであり，それは日本のこの部分を覆い，それについては，私は時に外形を非常によく規定できた。その他の諸領域はそれからもっと自由であり，私はこの観察を支持する多くの医学的事実を見出している。

我々は寺院に一度より多く参拝したが，他の宗派の宣教兄弟と共に，老いた教区牧師と面白い対話をした。彼は私に考古学についての立派な日本の古い著作を見せてくれた ── 約100冊の大量に図解された薄い巻子から成っていた。幸運にも数年後に完全な巻本を東京で入手したが，仏教に関する貴重な図柄を含んでいた。僧侶たちは皆，日本仏教の衰退を見通しているようだったし，或る者はまた，今でさえ，日本人の間の闘いは科学的不可知論とキリスト教の間のものだとかなり明確に見ている。ローマとギリシャの体系は日本人が極めてよく考慮していて，常に，その基礎がある限りは「改宗者」が出ることだろう。「ギリシャ人」たちは我々の書籍を主に用い，彼らは聖書も読む。私は信ずるが，彼らの多くは，それらへの信仰を獲得した。

或る霧の日，非常に野性的で印象深い渓谷を訪れに出かけた ── その苔生した大石を貫いて泡立つ流れがあり，雷鳴のような音をたて，小さいが非常に浪漫的な滝を幾つか形づくっていた。渓谷の真ん中に，豊かな茂みから2つの岩山の絶壁の峰が立ち上がっていた ── 土は少なく，苔生し豊かな多色の蘚苔類がこびり付いていた。それぞれの峰の頂上の割れ目には非常に巧みに仕上げられたブロンズの妖精が立てられていた。二つの象は，ほとんど等身大だったが，異なった観念を現していた。これ以上に異様に陰鬱で非人間的なものを見たことが無かった ── 子供の夢の中でさえ。それらは真に高度の芸術品であり，特徴的に日本的だった。それをそこに据えた者たちは囲繞する野生の情景との混然一体感の鋭い感覚を持っていたに相違ない。

私は実行すべき他の諸計画もあった。しかし，何かをやれる前に，そしてある夜中にランプの傍で蛾 ── 沢山いてとても美しい ── を捕まえていたとき，政府の使いが電報をもって現れ，私に直ちに参上するようにとのことだった。ちょっと眠った後で，病気の子供たちを残して，夜明けに友人 ──

彼については既に触れたが ── と出かけ，山越えの余りに不幸な近道を取った。もちろん道に迷い，陽が温まりその仕事に就いた直後に，それを下って来た長く露出した山脚（spur）をまた昇ることになった。私はとうとう気落ちし，気分が悪くなり，喉が渇いて，植物の葉に残っている露を幾らかでも舐めて幸せだった。友人は，道に戻った後，戻らなければならなかった。私の靴は鋭い石によって切り裂かれ，かなりイカレてしまったので，投げ捨てた。乾いた川の殺風景な川床は，道の代わりになっていて，半時間以上も私を忙（せわ）しなくしたが，次いで，面倒も終わりに来たと思ったとき，茨（いばら）の多い歩道が眼前に魅力的に展開していた。敗れた衣服，靴無し，脚を引き摺り，出血した足で，私は停止点に，計画遂行にちょうど間に合って到着した。私の有様は尊敬を促進すべく計算されてはいなく，山々の麓の僻遠の村の小さく汚い茶屋で，極度に荒っぽい受容と歓迎を受けたのだった。好意的な人力車夫が私を普通の料金の２倍でちょっと引き受け，私は一足の足袋と草履を得たが，しかし気づくと，間違って婦人物を供されたのだった。しかしながら，それらは極めて清潔で心地良かった ── もっとも，旅人たちから心地良さを越えた注目を浴びたのだが。

私は新手の男二人を加え，高速で丘や谷を越え，イモトソウと流れを越えて行き，終に大きく絶景の八王子（Hachoji）の町に着いた ── 綺麗で冷たい川があり，その大きな聖なる車は，今や塗装とワニスに輝いて，近づき始めた。そこで，座布団に胡坐（あぐら）をかいて座り，箸を使ってたっぷり食事をした後，私は古びた奇妙な乗り合い車をつかまえ，それは東京に着くまでやっと我慢できる代物（しろもの）だった。東京は何時ものように大きな炎の輝きで赤かった。

ヘンリー・フォールズ（８）

(1)　三浦（みうら）　徹（とおる）（嘉永３(1850)-大正14(1925)）

６，７章に次いで伝道旅行である。沼津（藩主水野出羽守）出身の三浦徹が協力に駆けつけている。三浦はフォールズと一緒に日本にやって来た宣教師デイヴィドソン（Rev. Robert Young Davidson 1846-1909）の日本語教師兼助手で

ある。それ以前に1年余りカロザースらとの接触はあったとはいえ，デイヴィドソンと出会ってわずか10日余りの明治8年9月22日に彼から洗礼を受けた事でも有名である。明治10年築地居留地6番会堂に東京一致神学校（明治学院の前身）が創立されると，前述の青山昇三郎，北原義道や井深梶野助，植村正久らと共に一期生として学び，長老派屈指の伝道者となった。明治10年12月デイヴィドソンを仮牧師として両国教会が組織された。三浦の父千尋が御用人格として仕えていた両国矢ノ倉の水野候の屋敷で伝道が始まり，明治10年末に教会となったのである。三浦の神学校卒業を待って三浦が牧師として就任した。また旧主水野家が上総菊間藩（明治元-4年に存在）に移封なった関係から千葉房総へしばしば出張伝道していたことは知られていたがフォールズとも伝道に行っていたのである。（主たる参考書『日本基督教会史』中『両国教会五十年略史』引用部分）

(2) 築地病院建設 ── 櫛部 漸（1845-1887）とフォールズ ──

この伝道旅行には同行していないがフォールズの協力者は医師で新栄（橋）教会長老の櫛部漸である。彼はフォールズの医学の弟子として，また築地病院副院長としてフォールズを助けた。

6章コラムで記したように築地病院建設の過程は複雑である。当時外国人は居留地のみに家作建築を許可され，相対借地での建築は許されていなかった。築地病院建設に当たって，まず櫛部漸が明治7年の12月に南小田原町4丁目10番（9，10番の連記載もあり）112坪7合5夕を借り受け，そこに櫛部名義で西洋風建築の病院を建て，それをフォールズに貸すことにした。建築費用の見積もり3,000円はフォールズが櫛部に無利子で貸すと取り決めて建築が始まり，フォールズは，返却分を差引いた2,700円を櫛部に渡した。病院が竣工して明治8年5月1日より家賃毎月32円でフォールズが病院として借りた。櫛部はフォールズに借金を返し，フォールズは櫛部に家賃を払うというやりとりはあっても，実際にはお金の動かない契約で，費用負担は全額スコットランド一致伝道局である。

病院の建った南小田原町4丁目9番（10番）の辺りには，「江戸切絵図」築地八町堀日本橋南絵図（文久年間）によると，小笠原長門守の屋敷があった。南小田原町3，4丁目の旗本屋敷・武家長屋は維新とともに明治政府に明け渡された。フォールズたちの借地・借家の主は，横浜で「藍謝塾」通称高島学校（明治4-6年）を経営していた高島嘉右衛門の弟高島徳右衛門である。

（ながお・しろう　名誉教授）
（たかはた・みよこ　英学史研究家）